

話題80 ティータイム(8) 海、そして海

名護湾。長い砂浜。高校生時代の思い出の砂浜である。その昔、琉米文化会館なる施設があって、放課後の勉強の場所に用いていた。勉強の合間をぬって、会館の裏手の砂浜に寝そべては頭を休めた。そこには水平線があった。夕日が沈む。涼しい海風。思いは遥か彼方になった。あの水平線を超えよう・・・と。

私は親父を知らない。私が3歳、妹が生まれて半年、親父は仕事上の怪我で亡くなった。5人兄弟の4番目。母親が一人で生活を支えていた。水平線を超える道は唯一つのみ。奨学金でもっての大学進学。他には、道は無かった。見えなかった。一筋の細道を歩んだ。歩んだつもりであった。しかし、そこには多くの方々の支えがあった。振り返ってみると、支え無くしては、歩むことはできなかつたものと思われる。

定年退職を迎え、故郷へ戻った。介護老人保健施設での勤務とした。これまでの根拠に基づいた医療の世界から、平均年齢90歳の方々の人生の物語に沿った医療への挑戦である。そこには、個々の生きた証があった。戦争を経験した方々の苦難の歴史があった。

「医学」。多分に平均的な年齢の対象を想定した学問であろう。「老年医学」もまた平均的な高齢者を対象にした分野の医学であろう。残念ながら、老健施設に入所の方々の約8割が認知症を合併しており、日常生活には手助けが必須である。食事はもとより、排尿、排便を含めて。「老年医学」の中の、さらに特殊な一分野のような気がする。

間もなく、自らもその範疇に入る年代である。名護湾の砂浜に、水平線と渚の2本の線が見える。水平線の彼方は、肉体から解放された世界、限りない宇宙への広がりへの中へ溶け入る空間、世界である。

渚。現実の砂浜は、人間の欲望による汚染に染まっている。ペットボトル。とんでもない日用品の残骸。今日の名護湾の波は、怒っている。ゴシゴシと地球を洗っている。

ましてや、この砂浜を戦争の道具に置き換えてはならない。

塵を拾いつつ、過去を、そして汚れた砂浜を踏みしめて歩く。・・・「ハチドリのひとつく」。